
デザートバイキング 『アッフォガート』

桜沢 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デザートバイキング『アツフォガート』

【NZコード】

N1592G

【作者名】

桜沢 純

【あらすじ】

双子の姉妹、ソラとウミ。両親を亡くした二人はお互いを支え合いながら暮らしてきた。しかしある日、姉のソラが恋人を連れてきた。ウミの心が揺れ動く……ほんのりGJ短編集『デザートバイキング』シリーズ。

「ウハ!!。」Jの人が、お付き合いでしてるスグルさん

「…………こ、こんにちわ」

「はじめまして。本当に、ソラとそつくりだね」

「それは、そうよ。だつて双子だもの」

お姉ちゃんが、恋人を連れてきた。

背の高い、美術の石膏像みたいな顔をする人。確かに格好良かつた。

お姉ちゃんはボクと同じ顔だけれど、柔らかい長い髪と、優しい笑顔。すごく美人。

ボクはお姉ちゃんと同じ顔だけれど、少しクセのあるポーネール。子供っぽい。

「それじゃ、スグルさんがお姉ちゃんと結婚したら、ボクのお兄ちゃんになるわけだ」

「ちょっと、気が早いわよ、ウハ!!」

「あはは。その時はよろしく、ウハ!!けやん」

「いらっしゃいそ、お兄ちゃん」

胸がざわついた。

きっと、これから、ボクは辛くなる。

三人でテーブルを囲んで、お姉ちゃんが作ったごはんを食べながら、楽しいひととき。

お兄ちゃんはとてもいい人で、頼りになつて、面白くて、すぐに好きになつた。

お姉ちゃんが好きになつた人なら、ボクも好きになるつて、わかつてた。

だけど、きっと、ボクは辛くなる。

ちつちやい頃、ボクはすぐ泣き虫で、いつもお姉ちゃんの後ばっかり追いかけてた。

ボク達は生まれつき身体が少し弱くて、お姉ちゃんは時々病院に行くくらいだった。ボクは時々熱が出るくらいで、だけど、お姉ちゃんがないないと眠れなくて、一緒に病院に行つてた。

お姉ちゃんは身体が弱くてもしつかり者で、活発で、明るくて、いつも笑顔だった。

そう、あの時も、笑顔。

その日、お姉ちゃんが検査入院で病院に一泊する」となった。お父さんがお姉ちゃんど。ボクはお母さんとお留守番。

だからね？」

二二

抱きしめる。

ପ୍ରକାଶିତ.

ソノハラ行くよ

お母さんがボケの、お父さんがお姉ちゃんの手をとつて、ボケ達

「やだーー！ あたしもお姉ちゃんと一緒に行くーーッ！！」

「お、オレ!!」

ボクはお母さんの手を振り払つて、玄関から飛び出す。雨が降つていたけれど、力サもせせずに走つていつた。門を開けて、道路に飛び出した。

一
あ
つ

キイイイイイツ！！

田の前に光。それは車のヘッドライト。

固まつて いるボクの身体を、抱きしめて……

「ソラ！ ウミー！」

「いやあっ！ ソラあッ！」

ボク達を避けよつとした車は、塗れた路面でスリップして、壁に激突した。

その、車の破片が。

「あ……ああ……おねえちゃんっ！！」

お姉ちゃんの、お腹に、刺さつていた。

刺さつて、真赤に、血が、溢れて。

「ウミ……大丈夫？ 怪我はない？」

お姉ちゃんは、二ツコリ笑つて、ボクの頭を撫でてくれた。

お姉ちゃんは、命に別状はなかつたけれど、お腹に、消えない傷ができてしまった。

ボクのせいだ。

泣き虫ウミのせいだ、お姉ちゃんのお腹に。

ごめんなさい、お姉ちゃん。

ごめんなさい、お姉ちゃん。

ボク、いい子になります。

ボク、強い子になります。

それから、ボクは『ボク』になつた気がする。

それから、数年後。

ボク達の両親が、事故で死んでしまつた。

二人で、何日も泣いた。

おじいちゃん達が『ウチに来るか？』と言つてくれたけれど、ボ

ク達は一人で、この家で暮らすと言つた。

お姉ちゃんはショックでゴハンも食べられなくなつて、ずっと泣

いていた。

その背中を見て、ボクは思つた。

今度は、ボクがお姉ちゃんを助けるんだって。

それから、毎日、毎日、ボクは掃除も、洗濯も、苦手な料理もした。

お姉ちゃんは、少しずつだけど、『ゴハンを食べるようになつて、ちよつとずつ、笑うようになった』くれた。

「ウ//……強くなつたね」

お姉ちゃんの言葉に、ボクは泣いた。

泣き虫ウ//はさう簡単にはなあらないけれど、少しは強くなれたんだつて。

いつも、お姉ちゃんとお揃いにしていた髪を、ポニーテールにしたのは、この日からだった。

そして、現在。

お兄ちゃんは、しょっちゅうウチに来るよつになつた。

「うーん……顔とか声とかはそつくりなのに、何で料理の味はこんなに違うんだう？」

「なーに。文句あるんだつたら食べなくていいんだよ？」

お姉ちゃんは病院の検査が長引いたので、今日は帰れないと連絡があつて、ボクとお兄ちゃんは一人で『ゴハンを食べてていた。

「いや、美味しいよ？　ただ、ウミの味付けは、ソラと違つて濃いといふか、なんといふか」

「美味しいならいいじゃない。男が細かいことをグチグチ言わない！」

「はい。すみません」

そんなやりとりをしながら、飯を食べ終えると、お兄ちゃんがコーヒーを入れてくれた。

「はい。ウミは砂糖三個だつけ？」

「せいかーい。よく覚えてるね」

「……もつすぐ、ほんとに妹になるからな」

「……」

「一人でソファに向かい合わせに座つて、コーヒーをすする。

「来月、結婚することにしたよ」

「そつか……おめでと」

「ありがとう……それで、や。ソラの体調もあるし、俺は一人暮らしだし、ウミやえよければ、俺もこの家で暮らそうかって、ソラと話してたんだ」

「ふーん……いいんじゃない? 部屋も余つてるし」

ズキン。胸が、痛い。

だけど、ボクは精一杯笑顔を作つて。

「そ、そつか……ちょっと、安心したよ」

「なんで? ボクが反対するとでも思った?」

「い、いや、お前ら、仲いいからわ……なんか、ちょっとな

苦笑するお兄ちゃん。ボクは、変な顔にならないように頑張る。

「でも、うん。お兄ちゃんがいてくれると助かる。庭の木も随分伸びちゃったし」

「え、俺、雑用係! ?」

二人で、笑う。

「んじや、ボクはちょっとお姉ちゃんに着替え持つていいくよ。お兄ちゃんはお風呂でも入つてくつろいでて。留守番よろしく

「え、あ、ああ。送つていかなくて平気か?」

「そんな子供じゃないよ。行つてきます」

ボクは用意しておいたおねえちゃんの着替えの入つたバッグを持つて、玄関のドアを開けた。

「あれ……?」

突然、涙が零れた。

「お姉ちゃん」

「あ、ウミ。ありがとウ」

「具合は?」

「ゼーんぜん。何ともないのに入院なんて、最悪。退屈で退屈で、

余計に具合悪くなるよ」

お姉ちゃんはくちびるを尖らせて、バタバタと両足をぱたつかせる。最近お姉ちゃんは、何だか子供っぽくなつた気がする。きっと

……お兄ちゃんがいるから。

「スグルさんは?」

「留守番してもらつた。今頃お風呂入つてるんじゃない?」

「……話、聞いた?」

お姉ちゃんが、恐る恐るつて感じで尋ねてきた。少し、不安そうな顔。お姉ちゃんがそんな顔をするのは珍しくて……なんか、昔のボクみたいだなつて、思った。

「うん。おめでと。最近物騒だし、男の人がいてくれると、安心だよね」

「ウミ……ありがとウ」

お姉ちゃんが、ボクの手を握つて、微笑んだ。胸が、ズキンて、痛くなつた。

「あ。ウェディングケーキ、ボクが手作りしてあげようか?」

「え、ちょ、ウミ、まともにケーキ作れたことないじゃない?」

あははつて、笑つた。

そつか。

お兄ちゃんがいてくれるなら、ボクはもう、いなくともいいんだな。

うちに帰つて、お風呂に入つて、鏡を見ながら思つ。

髪を下ろせば、お姉ちゃんと同じ姿。

同じ顔。同じ髪。同じ……傷痕。

右の脇腹に、傷痕。

お姉ちゃんが、私をかばってくれた次の日。お姉ちゃんが怪我をした同じ場所に、突然傷痕ができていた。

双子だから？

わからないけれど、この傷痕が、ボクを強くしてくれていた。だけど、もう、ボクがいなくたって、お姉ちゃんを守ってくれる人がいる。

大好きなお姉ちゃん。

大好きなソラ。

大好きな……。

急に、寂しくなって、怖くなって、お風呂場で泣いた。

泣き虫だったころに戻ったみたいに、シャワーを浴びながら泣いた。

「結婚おめでとう。お兄ちゃん。お姉ちゃん」

「ありがとう」

「ありがとう、ウミ」

結婚式。お姉ちゃんはとってもキレイだった。

「髪……切ったんだね」

「うん。似合つてるでしょ？」

首をかしげるボクに、ウェディングドレスのお姉ちゃんは、そうね、って笑った。ちょっとだけ、寂しそうに。

「大人っぽくなつたじゃん」

「コラコラ、ボクに惚れたらいけないよー？」

お兄ちゃんも、格好よかつた。

結婚式前日。ボクは髪を切つた。

鏡の中からお姉ちゃんが消えていった。

心の中に、ぽつかりと、大きな穴があいた。

「これからも、よろしくね」

そして、バイバイ。

ボクのお腹から、傷痕が消えた。

(後書き)

あまりG-要素はありませんが。
タイトルと合わせてお楽しみ頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1592g/>

デザートバイキング『アッフォガート』

2010年10月8日13時16分発行